

目的 現在、家族は第三の転換期を迎えている。伝統的な性役割規範の問い直しを背景に、家族の個人に対する拘束が弱まり、個人が家族から相対的に自由になる個人化(individualization)の傾向が強まっている。家族に拘束されていながら家庭外での諸活動が十分にできない、もっと個人としての側面を重視して生きたいということである。こうした家族の個人化傾向は、当然家族の下位システムである夫婦関係のあり方をも変化させているはずである。本研究では、1)夫婦関係における個人化はどの程度みられるのか、2)夫婦の個人化とパートナーシップにはどのような関連があるのか、を明らかにしたい。

方法 夫婦の個人化は、意識レベル(夫婦単位より個人の相対的優位の意識)と行動レベル(夫優先より個人優先の生活場面)で把握した。パートナーシップは、相互成長意識、相互援助意識、老後生活意識、死後同穴意識、活動の夫同性などでとらえた。調査対象者は、子育てからある程度開放された中年期の女性で、都内およびその周辺の短大、大学生の母親である。郵送法で回収率は46.4%(255名)。有夫、末子中学生以上、40~59歳までの条件を満たす236名を分析した。平均年齢47.9歳、その夫51.2歳、71.2%は有職。年間世帯収入は6割が900万円以上。居住地は84.4%が関東地区。

結果 ①意識レベルの夫婦の個人化は進行している。②行動レベルの個人化傾向は意識レベルほど強くはなく、夫に合わせて行動している女性の方が多い。③意識レベルと行動レベルの個人化には正の相関が認められる。④常勤の女性は、意識と行動レベルの個人化得点の高い者が多い。⑤個人化とパートナーシップは負の相関が認められる。